

泉鏡花『沼夫人』における作品舞台とモデル

西 蘭 有加利

一、はじめに

明治三十五年八月五日から九月上旬にかけて、逗子に一度目の滞在をした泉鏡花は、再び明治三十八年七月下旬から明治四十二年二月という長期に渡って逗子に滞在する。『沼夫人』は、二度目の滞在期となる明治四十一年六月「新小説」に発表された、「逗子もの」の一つである。梗概は以下の通りである。

夏の一夜、医学士酒田宅の診察室で、夢現に感じた女性と水の気配に目覚めた小松原立二は、婦の骸骨と戸棚の音から逃げ出したところを酒田に遭遇する。そこで小松原は、三年前の出水の際、出征中の軍人の妻お房と散歩に出掛けたものの、水の勢いに帰れなくなった結果、共に汽車に轢かれ、彼女と生き別れになったことを酒田に語る。その後、水の怪異に縁があると思しき婦の骸骨を、元在った蒼沼へ返しに行った小松原の前に、お房が現れる。芭蕉／水芭蕉が月夜を妨げることを嘆く彼女に応え、小松原が小刀で切り倒したところ、そのまま蒼沼に引き込まれそうになるが、車夫の正吉に助けられる。

同時代評は、内容を鏡花的なものとして評価する一方、草双紙的であるとする⁽¹⁾。また、紅野敏郎氏⁽²⁾に拠れば、木下利玄が七月四日の日記で「午前鏡花の『沼夫人』(新小説六月号)をよむ。中々うまい、殊に田圃の中の出水に小松原が房子夫人と夕闇にとり残されるあたりは最もいゝ。主人の医学士はいゝ、が小松原迄が話上手に一寸うすい乙な事を云ふのはあゝ、した場合ちと浮いてる、それから終に蒼沼で夫人の幽霊が出てものを云ふがあすこに幽霊を出さず出してもあゝ、はつきり話迄させずまぼろしに出した方がいゝと思ふ。主人の学士は多情多恨の葉山のやうな快活な人にかゝれて居る、文章は活きて居る。」と、やはり鏡花の描写の巧さを讃えつつも、蒼沼における怪異描写については否定的である。

先行研究では、眠りや夢の水との関わりについて論じたもの⁽³⁾が多いことを西尾元伸氏⁽⁴⁾が指摘している。西尾氏⁽⁵⁾は、本作が謡曲『杜若』を素材としていること、蒼沼の怪は小松原の神経作用だけが原因とは言い切れず、また、小松原の抱く夢の「水」と蒼沼の「水」との隔たりが解消せずに作品が展開していくと論じている。

その他にも、弦巻克二氏^⑥は、幼時以来の幻影である華胥の国の夢を、運命の予兆の如く刻印された小松原は、自分の見た幻影に自己の運命を託していると論じ、松村友視氏^⑦は、「夜の暗さのなかで倫理に背く恋を促す力」を持った沼の水に、「倫理の規ともいふべき芭蕉の葉が切り払われ」、月影が射し込んだことで、夫人の恋は成就したとする。この月光には、「日常の価値と論理の転換を迫る鮮明な意志が託されて」おり、「不倫」という負の価値を突き抜けた至情は、その純一さゆえに逆に日常の「倫理」をうつつ力でもあり得たの」だとしている。

西尾氏^⑧も指摘するように、先行研究では、水そのものに着目し、その象徴するものについては論じられてきたが、「逗子もの」としての『沼夫人』、つまり「逗子」の水については語られてきておらず、また、登場人物のモデルに関しても言及されていない。

そこで本稿では、まず作品の舞台が逗子のどのあたりか分析し、次に本作に登場する医学士酒田のモデルについて考える。その上で、自筆原稿と初出の比較や蒼沼に充溢する芭蕉のイメージを検討したい。

二、作品の舞台——出水、そして蒼沼——

鏡花の滞在した逗子は、明治二十二年に逗子村、桜山村、沼間村、池子村、山野根村、久木村、小坪村が合併し田越村^{たごえ}となった場所であり、同年大船から横須賀を繋ぐ横須賀線が開通し、逗子駅〔図一〕の①が開設された。

「逗子もの」としての『沼夫人』を考えるにあたって、小松原とお房が三年前遭難した場所は、田越村のどのあたりだったのか。まず、その特定を試みたい。

小松原の「借りて居た家から、田畝^{たんぼ}「田圃」の方へ一町ばかり行つた処」(第十、「」内は岩波版全集。以下同じ)にあるお房の住居から、彼等の散歩は始まる。仮に、当時鏡花の住まいであった「田越村大字逗子字亀井九百五十七番地」〔図一〕の②が小松原の家とすれば、お房の家も逗子地区の範囲内と想定される。

「川らしい川のない処」(第十一)に出水があったため、小松原はお房に「踏切の方へ行つて見ませう。水が出たさうですから。」(第十三)と誘うのだが、「一番近い田畝「田圃」へ出るには、是非、あの人(お房)が借りて居た其の商家の前を通る」(第十一)が必要があった。

これらの条件から、彼等が向かった方向は、停車場に近い踏切を渡り、なお且つ田越川の本流から外れた場所であり、結果、そこは田越村の東方に位置する久木方向と特定される。明治七年、柏原村と久野谷村が合併してできた久木には、鏡花が頻繁に参詣した岩殿寺があり、『春昼・春昼後刻』(明治三十九年十一月・十二月「新小説」)には、漢字は異なるが柏原と久野谷の名が登場する。

踏切までの道は、「百姓家二三軒で最う暇だが、彼処は一方畑だから、じとく濡れて」(第十三)おり、「片方に田はあつても線路へ掛けて路が高」(同)く「為に別に水らしい様子も見え」(同)ないというが、〔図一〕の②の鏡花宅から③の踏切に向かう道)でも、片側が田でもう一方が畑(地図記号のない空白部分)であることが確認できる。



【図一】「逗子及び周辺図（明治36・39年測図）」二万分の一地形図（『逗子市史』資料編Ⅰ「古代 中世 近世Ⅰ」付図（昭和六十年三月逗子市）

- ①停車場、②明治三十八年から四十二年までの鏡花宅、③踏切、④風早橋、⑤線路と川の交差点、⑥隧道、⑦岩殿寺、⑧妙光寺、⑨名越池、⑩中池、⑪柏原池、⑫千葉病院 数字は引用者が記入。

踏切（【図一】の③）を越した後、「最う少し隧道」（【図一】の⑥）の方へ行くと、「路の真中に、縦に掛けた一寸した橋」（第十三）があり「棒杭のやうに欄干がついて」（同）いるという。踏切を越えて一つ目の橋は、「風早橋」（【図一】の④）であろう。

久木体育会創立40周年記念誌発行委員会編『続わたしのふるさと久木』（平成十二年三月久木体育会）に拠れば、「昔は家数が少なく風が強く吹いた場所」で「物資の運搬には馬力が使われていた」といい、風早橋より一つ上流側の「松葉橋」を、以前は風早橋と称したという。該書に松葉橋が風早橋の名であった時期は書かれていないが、風早橋の名は『懸香』（大正四年九月「新小説」）にも登場し、「鉄道の踏切を越した処」（第六）に、「風早橋と云ふ小橋が一つ」（同）とあり、その風早橋に「魔の通ふ欄干つき

の渡殿だと風説」(同)が立っていることから、『沼夫人』の橋と同一の風早橋と推察される。その後、彼等は、風早橋を横切つて、山から浜田へ流れる小川を見る。

彼(風早橋)を横切つて、山の方から浜田へ流れて出る小川を見ると、是は又案外で、瓦色に濁つたのが、どうく〜と唯一巾「幅」だけれども畝を立て、「て」、橋の底へすれ〜に凄じいほど流れて居る。平時は俯向いて、底を、「全集」、「ナシ」見るのが、立つて、伸上つて見送るほど、嵩増して、(第十三、傍線引用者。以下同じ)

此の水が、路端の芋大根の畑を隔てた、線路の下を抜ける処は、物凄い渦を巻いて、下田畝「下田圃」へ落ち懸る(第十四)

【図一】でも、川と線路の交差点(【図一】の⑤)の周囲は畑(地図記号のない空白部分)の広がっていることが確認できる。

小松原たちが眺めた田越川の支流である久木の川は、『新編相模国風土記稿』第五集(明治二十一年十月谷野遠)に拠れば、「久野谷村ノ谷間ヨリ出ツ小名御繩崎ヲ流レ逗子小坪ノ村界ニ至リテ御繩川ノ名ヲ得」、「直ニ田越川ニ合」し、「川幅五間」という。また、神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会編『神奈川県皇国地誌残稿』上巻(昭和三十八年三月神奈川県立図書館。『皇国地誌』の編成は明治十一年、久木村の部は現存せず)所収「相模国三浦郡逗子村」(草稿本)では、さらに下流へ流れると「田越川」の支流となり「川間川」の名がつく

のだが、「水源ハ本郡久木村ノ山間ヨリ発シ本村亥ノ方久木村ヨリ来リ径過スルコト拾式丁式十一間ニシテ申ノ方田越川ニ入ル巾広キ所ハ四間狭キ所式間最モ深キ所八尺浅キ所壹尺水勢緩ニシテ清シ舟筏通セズ」とある。

久木体育会20周年記念事業実行委員会企画『わたしのふるさと久木』(昭和五十五年九月逗子市久木体育会)に拠れば、昭和七・八年に行われた耕地整理のための工事以前は、「久木地区には川らしい川が無く、一度雨となれば、奥深い谷戸谷戸からの水は柏原から久野谷耕地にわたり川と化し、不作」に繋がったという。逗子市地名調査研究会編『逗子市内の地名調査報告書』(平成十年七月逗子市教育委員会)でも、大水によって田の排水が悪くなった結果、一面水で覆われ、池も大きく広がるような状況であったといい、雨量が増して出水が起こるという『沼夫人』の描写に一致する。

川の流れを眺めた彼等が「線路を田畝「田圃」へ下りた」(第十四)後、どのように進んだのか。第十四から第十九の本文記述に拠れば、彼等は「田畝「田圃」道」(第十四)を「八分目ほど」(同)進み、「一本橋」(同)を一度渡った後、再びその橋を渡る。しかし、そのまま往路を引き返すのではなく、支流の川が通り、迂回して踏切の処へ出る「最(も)一つの路」(第十五)を選択した結果、水田地帯に遭遇し、橋の対岸には松原に囲まれた別荘地のある場所まで出るが、渡ることができず、彷徨する間に遭難状態へ陥る。

本文に「田畝「田圃」道」(第十四)の進行方向や方角を示す描写はないため、川と線路の交差点(【図一】の⑤)を起点にして、川の

流れから経路を考えたとき、二つの仮説が立てられる。A久木の川の上流に向かって、久木方面へ進む経路と、B久木の川が、本流である田越川と合流する新宿（東小坪）方向へ進む経路である。この二つの経路の中で、より可能性が高いのは、Bの新宿方面の経路と考えられるが、まず、Aの久木方面の場合を検討したい。

風早橋（【図一】の④）よりも上流の川の流れは、【図一】では確認できないが、水田のある場所には細々と川筋があったと考えられ、少々時代は下るが、耕地整理以前である【図二】では、風早橋から、岩殿寺、妙光寺を通る道沿いの川筋（【図二】の①及び②）と、柏原への道沿いの川筋（【図二】の③）の二つに分岐している。



【図二】「逗子町全図」（昭和二年測図）一万五千分の一地形図（改訂逗子町誌刊行会編『改訂逗子町誌』昭和四十九年十月逗子市付録）

- ①風早橋から岩殿寺への道沿いの川筋、②妙光寺を通る道沿いの川筋、③柏原への道沿いの川筋、④新宿の川筋 数字は引用者が記入。

また、「続わたしのふるさと久木」（前掲）では、【図三】の③に、明治三十四年清川氏、土田氏が別荘を所有していたとあることから、別荘地の条件に該当する。さらに、【図三】の④周辺は堰場と呼ばれる場所であり、逗子市誌編集委員会編『逗子市誌』（第八輯 沼間・久木文書（下））昭和五十四年三月逗子市役所 所収の、久野谷村について書かれた「地誌御取調書上帳」（末尾に文政八年「一八二五」巴西三月 三浦郡久野谷村名主六郎兵衛の署名）に拠れば、「字閨場」に「長八尺幅六尺」の「石橋」があったという。

したがって、Aの経路の場合、線路と川の交差点（【図三】の①）から久木方向へ道を進んだ後、西（【図三】の③）へ行き、そのまま踏切に繋がる大きな道に戻ろうとしたと考えられる。しかし、別荘地の手前に橋がないため、久木方向に進んだとは首肯できない部分もある。

一方、小松原とお房が新宿方面に進んだと判断する点は三つ挙げられる。

まず、小松原は、橋を渡り、「最う一つの路」（第十五）を選択する前は、「漁師町を一廻りして帰れる」



【図三】「豆子及び周辺図（明治36・39年測図）」二万分の一地形図（『豆子市史』資料編Ⅰ「古代 中世 近世Ⅰ」付図（昭和六十年三月豆子市））

①線路と川の交差点、②風早橋、③久木の別荘地、④堰場、⑤橋、⑥新宿へ下る道、⑦別荘地と松原、⑧堰場へ繋がる道 数字は引用者が記入。

（同）と思っていたが、自筆原稿では、この「漁師町」の後に「浜を」と書き、その上を墨で削除した跡が見られる点である。鏡花が、進行方向としては浜のある新宿方面を想定していたと考えられる。

次に、線路から眺めた景色が根拠として挙げられる。「一面の浜田」（第十四）を眺めた小松原が、後に辿り着いた田で「線路から眺めて水浸の田は、此処だらう」（第十六）と思うことから、線路で見た景色の方向に、二人は進んだことがわかる。傍に居た親仁が「汐が上げ「つ」たら、まつと溢る」（第十四）と出水の具合を答えた後、小松原は「漁師町を繞つたり、別荘の松原を廻つたり、七八筋に分れて、又一ツに成つて海へ灌ぐ」（第十四）と川を形容することから、彼等の視線は、川の下流である新宿側を向いていると推察される。

さらに、「二人で見て居るうち、夕日の名残「なごり」が、出崎の端から発と雲を射たが、親仁の額も赫となれば、線路も颯と赤く染まる。」(第十四)とあるように、線路に立つ彼等は西日を受けている。久木方面を向いた場合、額に西日は受けにくい。したがって、彼等は線路と川の交差点【図一】の⑤から見て、南西の海側に位置する新宿方面へ進んだと考えるべきであろう。

そこで、彼等がB新宿方面へ歩んだ経路を検討したい。【図一】に久木の川と線路の交差点⑤より下流の川筋に架かる橋は記されていない。「田畝「田圃」道」(第十四)のため、表記されなかった可能性はある。しかし、参謀本部陸軍測量局編・大日本測量(株)調査部複製『神奈川県迅速測図二万分一』「18小坪村」(明治十五年測量同二十五年修正、昭和五十年昭和礼文社)には、線路から緩やかに下方へ流れる川が、南西の方角へと水路を変更する直前【図三】の⑤に、橋の存在が確認できる。

川の支流に関して、【図一】では確認できないが、【図二】に抛れば、線路と川の交差点より下った後、西方向の田に向かう小道に水の流れ【図二】の④が記されており、この水田地帯が線路から見えた「水浸の田」(第十六)【図三】の⑥及び⑧の周囲と考えられる。この道を進み、田の果ての十字路で久木方面に戻る道【図三】の⑧へ行けば、踏切へ繋がる道へ戻ることができる。

しかし、「最う一つの路」(第十五)は、対岸に別荘がなくてはならない。新宿の別荘地帯とその周囲の松原は、前述の水田地帯からさらに南下した場所【図三】の⑦にある。つまり、線路と川の交差点

から下った後、西方向へ曲がらずに、新宿の浜及び別荘方面へ進む道【図三】の⑥を南下)を辿った可能性がある。【図二】にはこの道にも川の流れ【図二】の④が記されているが、途中の「巾「幅」一間とは無い」「二寸した橋」(第十六)は、小さな橋であるためか、確認できない。さらに、この経路で踏切の道へ戻るには、別荘地【図三】の⑦の並ぶ道を西方向に進み、行き止まりで北上【図三】の⑧の道)しなくてはならないため、遠回りではある。

このように、浜田や松原、別荘などの規模や方向、夕日の射す方向や自筆原稿の叙述を鑑みれば、彼等が、B新宿方面の経路を進んだ可能性が高い。しかし、場所を完全に特定できる記述が『沼夫人』にならぬこと、また、本作は小説であるため、場所に関して脚色がある可能性から、新宿方面の正確な経路を完全に確定することは難しい。或いは、本作が小説であることを鑑みれば、出水によって通常の道が通常でなくなり、方向感覚を失い、まるで迷路の中に陥ってしまったかのような小松原たちを表現するために、鏡花が新宿の地理を織り交せて描写・脚色したのかもしれない。

次に、蒼沼のモデルについて。酒田の妻の言では、「梅雨あけに水が殖へた」(第二十一)ことで「蒼沼が溢れ」(同)、「田畝「田圃」へ水が出」(同)で「踏切の前の橋も落ちた」(同)のであり、診察室の骸骨は蒼沼の底から流出したものだという。その蒼沼は、「自分とあの人とが為に浮名を流した、浜田の水の源」(第二十二)であり、田の用水もそこから来るため、蒼沼は前述した久木の川の源と考えられる。

蒼沼へ向かうには、「村の故道ふるみちを横へ切れる細い路」(第二十三)を進む必要があり、そこは「次第しだい高の棚田に架つて、峯「峰」からなぞへに此方こなたへ低い」(同) 状況で、道幅は、馬の通る位の規模であると描写される。蒼沼は「山の裾を分け上」(同)り、「右に「へ」折曲つて最う一谷戸」(同)を進まねばならず、山の奥深くに位置していたことがわかる。

久木の川の源流に関して、逗子教育研究会調査部編『逗子市誌』(第二輯 古老を囲んで)昭和三十一年十二月逗子市役所)所収「久木地区古老を囲んで」に拠れば、明治生まれの古老の証言として、「中池、名越池、柏原池などがあり、久木は「田と畑ばかりであった」。これらの溜池について、『逗子市内の地名調査報告書』(前掲)には「久木大池」、「柏原の池」、「名越の池」などは水がない時は流し、ばあつと流れると溜めたり、田んぼをやって行くには大変」であったという。つまり、これらの池が水田用水であることがわかる。

名越池(【図一】の⑨)は踏切を越えて風早橋を渡り、トンネルの方へ向かう道の途中に位置する。『沼夫人』の蒼沼までの道と比較すると、やや平地に近く、久野谷の田の水の流れから外れる。

中池は、【図一】の⑩のように二つの池が連なっている。前掲『逗子市誌』(第二輯 古老を囲んで)には、「中の谷戸溜池」とも記され、現在は耕地整理によって一つとなり、久木大池と呼ばれる池である。

柏原池(【図一】の⑪)について、飯田武二編『柏原』(昭和六十二年二月柏原の会)は、「柏原大池」とも言われること、「柏原の奥」「土

手を積み上げた手造りの大池」で「瓢箪に近い形をしており、周囲は一部岩肌の鼻もあるが、左右びつしり笹竹や樹木でかこまれ」、「大池では結構鮒もつれたし、手製の釣道具で楽しめ」、「田植頃に水が抜かれ、子供の膝位までの沼の中では鰻も手づかみでとれた」という。

二つの谷戸の内、右手に位置している点で、蒼沼のモデルとしては柏原池の方が相応しいと言える。また、中池は二つの池が連なっており、本作の記述とは異なる。一方、地図で確認される規模から考えると、中池の方が「浜田の水の源」(第二十二)に相応しい。したがって、鏡花は、久木の川の源流である、柏原池・中池をモデルに蒼沼を描写したと考えられる。

三、医学士酒田のモデル——千葉吾一氏——

『色暦』(明治四十三年十月「新小説」)冒頭で、線路事故の見解を述べる検死の医者及び『沼夫人』に登場する医学士酒田のモデルが、大庭征露氏のエッセイ「母から聞いた鏡花先生のこと」⁹⁾から、彼の父親である千葉病院院長千葉吾一氏であることは、拙稿「泉鏡花『色暦』論——素材・モデルを中心に——」(平成二十七年十月「国語国文」以下「前稿」)で述べた。

大庭氏は、鏡花との交流を「三十年以上前(明治末年)」と推測し、「鏡花夫妻と私の家との関係は今時普通の医者と患者との間よりも少し親しいものであったらしく、出不精の母も時々散歩に引張出されたという。

酒田のモデルが千葉吾一氏であることを詳細に検討するにあたって、まず、彼の経歴を明らかにしたい。

黒田康子氏¹⁰に拠れば、安政六年「一八五九」（戸籍では万延元年「一八六〇」）、宮城県の代々続く医者の家系に生まれた千葉吾一氏は、明治十四年には既に五日市町（現・東京都あきる野市）に応天堂病院を開業し、自由民権運動に参加していた。

また、百年誌編纂委員会編『逗子開成百年史』（平成十五年四月逗子開成学園）所収の履歴に拠れば、明治十五年十一月海軍軍医補、翌年十二月海軍少軍医、明治二十三年九月海軍大軍医。日清戦争の始まった明治二十七年十二月に旅順口海軍根拠地海兵団軍医官、翌年四月劉公島要港司令部軍医長、六月劉公島衛生委員長、劉公島要港司令官、十二月軍艦警備城軍医長を務めている。その後明治三十年三月従六位に叙され、十二月軍艦比叡軍医長、明治三十四年六月軍艦鎮遠軍医長、十一月勲五等瑞宝章授与され、明治三十六年六月予備役となる。その後「逗子に静養園^{しやうやう}医院を開業し、後に千葉病院と改称」、明治三十七年五月から明治四十五年まで第二開成中学校の校主を務め、昭和二年逝去した。

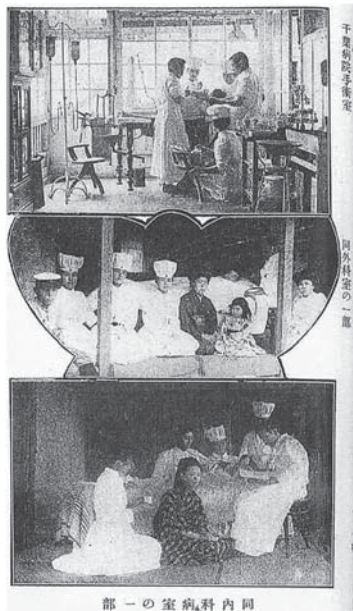
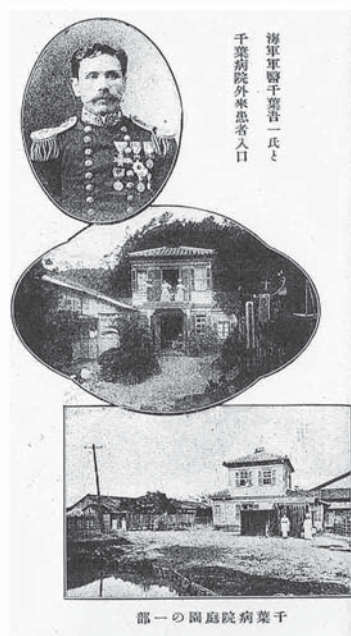
黒田氏¹¹は、田越村定住が確認できる明治三十七年二月以前には、千葉病院を開業したとする。『逗子市史』資料編Ⅲ近現代（平成三年三月逗子市）にも、「明治三十七年四月一日、旧称田越村村医就職以来、大正十五年四月拾五日辞職ニ至ル迄、其ノ年数二十ヶ年ニ及ヘリ」とあり、開業は、予備役となった明治三十六年六月二十四日から、遅くとも明治三十七年四月の間と考えられる。鏡花の二度目の逗子滞在

は明治三十八年七月下旬であるから、当時既に千葉病院は開業していた。

『沼夫人』の設定と比較してみよう。本作では、お房に出会い、「鉄道往生」（第九）未遂を引き起こした時を、「丁ど戦争のあつた年」（第十）である「三年前」（第九）の「九月の末」（第十）とする。本作発表が明治四十一年六月であるから、作中の現在時間は明治四十年夏であり、したがって彼等の出会いは明治三十七年の「七月益過ぎ」（第十）となる。小松原は、お房よりも一年早く明治三十六年に逗子に来たことになり、鏡花の滞在時期と一致しないが、「出征軍人の妻」という設定のため、日露戦争の起こった期間内に変更したと考えられる。

前稿でも引いたが、増島信吉『逗子と葉山』（大正二年八月松林堂書店）「現今の逗子」に拠れば、千葉病院は「本宅及び診療所と道路を隔て、病院を有し」ていたため、本宅と診療所が同一の建物だったとすれば、邸宅の一室に診察室がある本作の設定に一致する。

これも前稿で指摘したが、「母から聞いた鏡花先生のこと」（前掲）では、鏡花は、吾一氏の所有する本物の髑髏が見たくて堪らないのにどうしても見る事が出来ず、部屋の前迄は行くが氏が戸を開ける前に逃げてしまったといい、本作で酒田の診察室に骸骨があったことと類似する。実際に吾一氏が髑髏を持った写真も残っており、厳密には本作の骸骨と相違するが、恐らく本物の髑髏すら見られなかった鏡花が、部屋に置かれた髑髏のイメージから本作を発想したと考えられる。検死を担当していた彼から、何らかの鉄道自殺の話聞いていた可能性もあろう。



【図五】大庭義人氏所蔵

【図四】増島信吉『逗子と葉山』（大正二年八月松林堂書店）

さらに、「沼夫人」の酒田と千葉吾一氏とは、身体的特徴や嗜好でも一致する。診察室での出来事に震える小松原を宥めながら、酒田が髯を捻る場面は、髯を生やしていた吾一氏の面影を写しているようであり、酒田が喫煙者であることも同様である。酒田が小松原と夜多くの酒を飲んだことや、「葡萄酒」(第八)の話も、西田耕三氏²⁾に拠れば、「海軍時代は、相当の酒豪」で「様々な洋酒の瓶が棚に並んでいた」ことと関連しているよう。また、本作で「医学士は嘗て一年志願兵でもあつた」(第七)とする点も、吾一氏が日清戦争で軍医として従事したことを踏まえていよう。

そのほか、『尼ヶ紅』(明治四十二年二月・四月「新小説」)において、海で溺れかけた江崎の妻を往診に来る医者も、彼がモデルである可能性が高い。『尼ヶ紅』の江崎は日露戦争の後遺症で神経衰弱に悩むが、こうした病状も彼から聞いたかもしれない。改訂逗子町誌刊行会編『改訂逗子町誌』(昭和四十九年十月逗子市)には、明治四十年に吾一氏が在郷軍人団を創設し、団長となったことから、彼を通じて軍人との交流があつたか。

以上のように、千葉吾一氏をモデルとする作品が複数見られたが、その理由は何だろうか。部屋の髑髏を除いても、幾つか考えられる。

まず、軍医という、軍人であり医者でもあるという肩書である。『外科室』(明治二十八年六月「文芸倶楽部」)の医学士高峰や、『龍潭譚』(明治二十九年十一月「文芸倶楽部」)の「海軍の少尉候補生」、『銀短冊』(明治三十八年四月「文芸倶楽部」)の軍人などの例から、鏡花が医者や軍人を崇拝していたことがうかがえる。鏡花にあって「他人の

妻」のモチーフはその初期から看取できるが、日露戦争という背景を得て、「軍人の妻」のモチーフが『銀短冊』同様、『沼夫人』でも描かれることになる。三年前「小松原／お房／軍人である夫」の形で繰り広げられた三人の關係は、自分達以外の人の気配に怯えた酒田の細君が、思わず一番近くにいた小松原の膝にしがみついたのを見た酒田が、「蒼沼の水は可恐しい、人をして不倫の恋をなさしむるか」と、「私は嫉まうとした。」(第二十一)と述懐するように、一瞬ではあるが、再び「小松原／酒田の妻／酒田」の形で連環する。

また、怪異／幻想に対する科学的な観点を取り入れるためでもあったと考えられる。西尾氏¹³は、酒田が医師として、小松原の見ているものを「神経」作用と解釈し、「茶化そうとすればするほど、逆に「神経」質な小松原を浮き彫りにしてしまふ」と指摘する。怪異を信じがちな小松原が、周囲の状況を、華胥の国の夢の実現や、お房のなす業によるものと感じていくのに対し、聞き手酒田は否定的であり、蒼沼から流出した骸骨もお房ではないとする。廊下に立ったとき、酒田は、小松原や妻以外の気配を感じて動揺するものの、診察室の骸骨の前に骸が三匹出ても、「嘸また蒼沼から、迎に來たと云ふだらうなあ。」(第二十二)とはぐらかしている。酒田が蒼沼の「可怪し」(第二十七)さを認めるのは、本作の最後、小松原から蒼沼での話を聞いたときである。酒田は近代科学に基づく医者であり、安易に怪異／幻想を信じようとはしない。怪異／幻想を、お房によるものか蒼沼によるものか区別できないまま、受け入れていく小松原という存在を描くためにも、対照的な酒田は必要だったと考えられる。

このように、千葉吾一氏は、鏡花の「豆子もの」に様々な素材を提供し、自らもモデルとなっているのである。

四、自筆原稿から見た『沼夫人』

——異同・改変・修正など——

『沼夫人』の自筆原稿は、慶応義塾図書館に所蔵されており、秋山稔氏¹⁴に拠れば、「題名「つきのぬま」↓「沼夫人」・和紙一一一枚・墨書」とある。ほぼ総ルビである。

この自筆原稿と雑誌初出を比較した結果、展開に関わる大きな異同は見られなかったが、細かな異同が相当数あった。初出の校正刷が現存していない¹⁵ため確定はできないが、これらの異同は校正段階での修正の可能性が高い。

自筆原稿については、檜谷昭彦氏・長谷川端氏・三田英彬氏「泉鏡花文庫自筆原稿目録——慶応義塾図書館蔵——」¹⁶に詳しいが、既に指摘された部分以外で、本作の解釈に関わる異同及び自筆原稿での修正を幾つか挙げてみたい。

まず、登場人物名の改変である。小松原は初出で「お房さん」(第十六)と呼びかけるが、自筆原稿では「町さんお町さん」と書かれており、前半の「町さん」が墨で消されている。小松原が骸骨に対して「骨になつても小町は小町だ」(第二十)と言うことから、「秋風の吹くにつけてもあなめあなめ」という声の在り処を探すと、野ざらしになった小町の髑髏の目を薄が貫いていたという小町説話を踏まえてい

ることは明らかである。その上に「お町さん」という名前になれば、その示唆するところがあまりにも明瞭であるため、敢えて「お房さん」へと改変したのではないだろうか。また、「酒田」の名前も、その下に「□嶋」（□は判読不能文字。以下同じ）や「竹井^{たけい}」という名の書かれた跡がある。「立二」のルビも当初「りふじ」ではなく「たつじ」であった。名前は執筆当初から定まっていた訳ではないことがわかる。第二は、小松原が蒼沼に引き込まれそうになったとき、お房の姿をした婦に縋る場面で、お房の黒髪が「冷く」「涼く」「たらく」と腕^{かひな}に掛る」（第二十七）とあるのが、自筆原稿では「腕^{かひな}に掛つ□接吻^{キス}る」の「つ□接吻^{キス}」を消した跡が見られることである。

第三は、末尾で、快復した小松原に対する酒田の台詞である。自筆原稿には、「昔^{むかし}だと、仏門^{ぶつもん}に入る処^いだが、君^{きみ}は哲学^{てつがく}を学^やつとる人^{ひと}だから、其^{それ}にも及^{およ}ぶまい。しかし、蒼沼^{あそぬま}は可恐^{おそろ}しいな。」と書かれているが、初出では「可恐^{おそろ}しいな」が「可怪^{あや}しいな」に改められている。さらに、この台詞に続けて、自筆原稿では、「□の意味^{あや}が解^{あや}るな。」という言葉があり、これを墨で消した跡が見られる。酒田が「蒼沼の可恐^{おそろ}し」さの「意味^{あや}が解^{あや}るな。」と小松原に論し、念押しすることから、『沼夫人』の主題がお房との再会よりも、蒼沼の恐ろしさ、怪しさを描くことにあったことがわかる。つまり、酒田の言葉からは、蒼沼でのお房は、小松原を引き寄せようとする蒼沼が見せたものなのではないかとの解釈が導き出される。この部分を削除したのは、読者の解釈が定まるのを避けてのことと推察される。

五、芭蕉のイメージ——蒼沼の怪しさ——

本作で、鏡花は蒼沼に群生する植物を一度だけ「水芭蕉」（第二十四）と表記し、残る九回は「芭蕉」（うち一回「大芭蕉」（第二十七））としている。水芭蕉はサトイモ科、芭蕉はバショウ科の植物であり、随筆『曙山さん』（明治四十年九月「新小説」）にうかがえる鏡花の園芸趣味から見て、両者を混同していたとは考えにくい。当時の愛読書であった前田曙山『園芸文庫』第四卷（明治三十六年十月春陽堂）「十月之部 芭蕉」には、「本来唐土より渡りたるものにて、事は平安朝以前に於けるもの、如し、其形は人の知る如く、翠緑滴るが如き葉にして大なる事丈許、幅一二尺、日本に在る植物にして、葉の大なるは之に過ぎたるはなし。」とある。さらに、「芭蕉は其丈の長大なるを以て、専ら園養され、殊に寺院の庭には、必らず此者の一株を栽^うえざる可^べからざる有様」とあるように、芭蕉は主に観賞用として庭に植えられていた。したがって、蒼沼には山地湿原に群生する水芭蕉（ただし主に標高の高い場所に生息）の方が自然である。一方で、芭蕉は水芭蕉よりも圧倒的に大きな葉を持つ。

「水芭蕉」よりも「芭蕉」の表記が圧倒的に多く、「大芭蕉」の表記もあることから、まず考えられるのは、編集過程で「大」と「水」が間違われた可能性である。しかし、自筆原稿では「大芭蕉」の「大」の上に「水」と書き直し、「みづ」とルビを振った跡が見られる。すなわち、鏡花は意図的に「水芭蕉」と書き直したのである。

水芭蕉の葉は、花が咲いた後、時に一メートル程の大きさになると

いうが、「森を欺くやうな水芭蕉」(第二十四)が「もの、十丈もあらうと見えて、恰も此の蒼沼に颯と萌黄の窓帷を掛けて、倒れに裾を開いたやう」(同)とあるように、鏡花は非常に巨大な水芭蕉を想定していると考えられる。蒼沼の奇怪さを強調するため、現実には有り得ない、お化けの如き大きさの水芭蕉を描写したのではないだろうか。なお、ここで言う「水芭蕉」を「水辺の巨大な芭蕉」と考える余地も皆無ではない。しかし、芭蕉／水芭蕉のどちらか一方と言うよりは、超自然的な架空の植物と見た方が良いだろう。

では、何故一箇所のみ「水芭蕉」とし、他の箇所は全て「芭蕉」としたのか。そこには、芭蕉が持つイメージが関係する。

例えば、謡曲『芭蕉』¹⁷では芭蕉の精が女性の姿で現れる。楚国の山中で、毎晩法華経を読経するワキ僧を密かに聴聞する前シテの女人は、ワキに草木成仏のいわれを尋ね、自らが芭蕉の精であることを仄めかし申入する。アイである楚国の人物が様々な芭蕉に関する説話を語った後、読経を続けるワキの許に、後シテの非情の精、つまり芭蕉の精である女が現れ、諸法実相を語り、舞を舞って姿を消す。特に、アイによって語られる芭蕉葉の夢の故事の変形話は、芭蕉の葉で骸を包む点で本作と類似する。すなわち、昔狩人が夢に山中で大鹿の死んでいるのを発見し、持ち帰ろうとするが一人では難しかったため、芭蕉の葉で大鹿を隠したところで目が覚める。夢心に嬉しくなった狩人は実際に山中に向かうが、死んだ鹿はおろか生きた鹿すら出会えず、夢の儚さを実感する、というものである。

澤田瑞穂氏¹⁸に拠れば、宋の洪邁『夷堅志』に類話がある。庚志

卷六「蕉小娘子」は、庭の芭蕉が化けたものと知らず、緑衣の女性と交わったため亡くなった男の話であり、丙志卷十二「紫竹園女」は、緑衣の女性を数晩泊めたところ男の具合が悪くなり、後に残った女の袖が芭蕉の葉であったため庭の芭蕉を抜き取ったところ血が流れたという話である。「泉鏡花蔵書目録」¹⁹の「支那の部」には「夷堅志(木)二十冊」とあるのみで、その詳細は不明だが、京都大学文学研究科図書館所蔵の乾隆戊戌年「一七七八」序「夷堅志」は甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸の各上下十集二十卷から成る線装本であり、その庚集下に「蕉小娘子」の話が記載されている。

日野巖氏²⁰に拠れば、日本でも、平秩東作編『夷歌百鬼夜狂』(天明五年「一七八五」成立)に、「物すこき形をみするばせをほも霜にはきえてうせぬべらなり」²¹とあるように、芭蕉の怪異が広く信じられており、また、佐藤成裕『中陵漫録』(文政九年「一八二六」成立)巻十三にも以下の類話がある。

昔し信州の某寺に一僧あり。夜、書を読んで深更に至る。一美人来て此僧に戯る。此僧、大に怒て此婦人を刀にて打去る。其帰路皆血点あり。翌朝、其血を尋至て見れば、庭間の芭蕉、尽く絶て地上に倒てあり。人々見て皆云く、此芭蕉の魂化生して婦人となりたるべしと云。(中略)琉球人に会して、琉球の蕉園の事尋るに、〔中略〕夜深更に此中を独行する時は、必ず蕉妖に逢ふ。其の形は皆婦人なり。敢て人を害する事なし。只人の其婦人を見て驚くのみ。他の害ある事を聞すと云。此妖を防ぐは日本の刀なり。刀

を帯て過る時は、此妖に逢ふ事なしと云て、各日本刀を貴ぶなり。

『日本随筆大成』第三期第二卷、昭和四年七月日本随筆大成刊行会）

美女に化した芭蕉を刀で斬るのは、本作で小松原がお房の幻に乞われて、蒼沼に群生する水芭蕉を小刀で切ることと類似する。謡曲『芭蕉』をはじめ、これらの説話から発想が得られた可能性が高いだろう。

以上、本作では、蒼沼に群生する巨大な水芭蕉に芭蕉の怪異を重ねていることを確認した。水芭蕉は芭蕉の葉とよく似ていることからその名のついたように、両者は葉の部分においては類似性を持つ。鏡花は、沼に生える植物として現実的に「水」芭蕉と書いたが、芭蕉の持つ怪しい女性のイメージを付与するため、それを巨大な水芭蕉として創造したのではないだろうか。蒼沼に群生していたのは、水芭蕉と芭蕉、両方のイメージを併せ持つ、この世ならぬ植物だったといえよう。

では、蒼沼で出逢ったお房は何者なのだろうか。西尾氏²²は、蒼沼で再会したお房は、小松原の内面世界が作り出したものでも、単なる幽霊でもなく、彼女を形作っているのはこの世で果たせなかつた女性たちの思いの集積であるとしているが、確かに蒼沼でのお房は、三年前のお房とは明らかに違う印象を受ける。お房は小松原に、自分が酒田の治療を受けていること、骸骨のことも自分が教えたと話すが、もしお房が生きているとすれば、あくまでも近代的論理に立つ酒田がこれを小松原に告げていないのは不自然であろう。ただし、酒田が婦の骸骨をお房ではないと断言したのは、実はお房が生きているこ

とを知っていたからだ、とも読めるが、その場合、お房の生存を小松原に隠す理由が必要となる。お房が生きていることは、小松原にとって救いとなるはずであり、隠す必要は無いだろう。

ここで、芭蕉の怪しいイメージを念頭に置き、蒼沼でのお房について考えたとき、小松原が、婦の骸骨を大きな水芭蕉の葉に載せて蒼沼に返したことが、何者か定かでない、お房の幻を顕現させる一因になったのではないかと考えられる。

六、むすび

本稿では、『沼夫人』が久木の池を舞台とすること、小松原とお房の辿った道筋を詳細に考察した。次に、医学士酒田のモデルが千葉吾一氏であること、彼が鏡花作品に多大な影響を与えたことを明らかにした。また、自筆原稿を調査することで、蒼沼における芭蕉／水芭蕉には、芭蕉が持つ怪しいイメージが付与されていることを明らかにした。寺田透氏²³のいうように、本作で「描写される湘南の自然はここでは背景や舞台装置ではなく、主要登場者と見なされるべき」なのであり、実在の逗子における久木の川や池、田など水のイメージが、鏡花の想像力によって本作に結実したといえよう。

明治四十一年に発表された「逗子もの」のうち、本作以外に『草迷宮』（二月春陽堂）、『頬白』（四月「文芸倶楽部」後に『頬白鳥』と改題）がある。寺田氏²⁴は、『草迷宮』の第四十四回で、女妖の語る明を主題というか対象というか、とりこんだ架空談が日常化された形

でこの作品の、小松原立二と、子供の保養について来ている出征士官の妻房子の關係に魅つてると言える」とする。しかし、より似通っているのは、『頬白』と、その二ヶ月後に発表された『沼夫人』であろう。この両者の詳細な比較は、別稿で述べたい。

注

- (1) 明治四十一年六月十三日「東京朝日新聞」「六月の新作」(篆隸子(西村醉夢)「極めてロマンチックな、神秘的な描き方、筆には申分がない、是で若し草双紙式の見方を捨て、近代的な深い意義を持たしたら鏡花君は蓋し日本のメイトルリンクだ、白眉の作。」「同年六月十五日「文章世界」「六月の雑誌」(無署名)「作者の特色を十分に備へたものといへばそれで足りる。この人の作に対して新旧乃至巧拙を問ふは、問ふ者が愚だ。」
- (2) 「木下利玄日記(新資料)(下)——「白樺」前史——」(昭和五十七年十月「文学」)。
- (3) 例えば、脇明子氏は「幻想の論理 泉鏡花の世界」(昭和四十九年四月講談社現代新書)所収「3心像の論理I——無意識の水」において、水への恐怖が薄らいでいるのは水面が半分越えられているからであり、パシユラールが水中での死を「オフェーリア・コンプレックス」と名付けたことに関連して、主人公の快い半睡状態は自我にとっては死を意味すると論じている。
- (4) 「泉鏡花『沼夫人』論」(平成十七年三月「阪大近代文学研究」)。
- (5) 前掲(4)。
- (6) 「鏡花の転換——幻影への錘鉛——」(昭和五十八年六月「文学」)。
- (7) 「水月」への意志 泉鏡花の描く夜」(平成七年十一月「日本の美学」)。

- (8) 前掲(4)。
- (9) 三浦澄子編『還子道の辺史話』第十七集(昭和五十九年十一月還子道の辺史話の会再録、初出「童説」昭和十四年十月)。
- (10) 「新宿界限メモ帳 一、西海岸(1)」(昭和五十九年十一月「手帳」第八十九冊)所収「大庭征露氏書翰」。
- (11) 前掲(10)。
- (12) 「自由民権家千葉吾一のこと」(「仙台郷土研究」平成五年六月仙台郷土研究会)所収大庭征露氏書翰。
- (13) 前掲(4)。
- (14) 『新編泉鏡花集』別巻二(平成十八年一月岩波書店)所収「自筆原稿所在目録」。
- (15) 『新編泉鏡花集』別巻一(平成十八年一月岩波書店)所収岩波書店編集部「編修資料目録」に拠る。
- (16) 慶応義塾大学国文学研究会編『近代文学 研究と資料』国文学論叢第五輯(昭和三十七年九月至文堂)所収。
- (17) 日本古典文学大系『謡曲集下』(昭和三十九年八月第三刷岩波書店)に拠り、戸井田道三監修・小林保治編『能楽ハンドブック第3版』(平成二十年四月三省堂)参照。
- (18) 「鬼趣談義」(昭和五十一年九月国書刊行会)所収「芭蕉の葉と美女」。
- (19) 『鏡花全集』一月報」十四(昭和十六年十二月岩波書店)。
- (20) 「植物怪異伝説新考」(昭和五十三年(月)日記載ナシ)有明書房。
- (21) 江戸狂歌本選集刊行会編『江戸狂歌本選集』第三卷(平成十一年二月東京堂出版。底本は文政三年「二八二〇」刊の粕谷宏紀蔵本)より引用。
- (22) 前掲(4)。
- (23) 『鏡花小説・戯曲選』第六卷(昭和五十七年四月岩波書店)「解説」。
- (24) 前掲(23)。

【付記】鏡花作品の引用は初出に拠り、明らかな誤植は岩波版全集を参照の上、

修正した。漢字は適宜通行の字体に改め、合字は開き、ルビは取捨した。西蘭による注は（一）内に示した。本稿は、平成二十七年九月十九日昭和女子大学で行われた第五十七回泉鏡花研究会例会での発表に基づく。席上御教示賜った方々、そして逗子調査においてお世話になった、大庭義人氏、逗子市教育委員会の方、矢野正浩氏に厚く御礼申し上げます。